

A-109 幼児の食生活に関する研究(第4報) 漁業地域幼児の栄養摂取について
県立新潟女子短大 ○岡田玲子 塚原 毅

幼児の栄養摂取に関する系統的研究の一端として、44~45年の約一年間新潟県の一漁業地域を訪れ、漁業世帯幼児の栄養調査を行った。対象地域は阿賀野川の河口に明けぬ町で、全世帯の約6%にあたる147世帯が漁業を営んでいる。漁船の規模は1.6~4.5t、近年の漁獲高は30年の64tを最高に、43年の44tと年々減少の傾向にあり、総所得に占める漁業所得の割合は平均30~40%である。調査対象は3~6才までの幼児14名で、年4回(2, 4, 7, 10月)にわたり、各回毎に連続3日間食事摂取量を国民栄養調査に準じて個人別に秤量した。対象幼児の摂取栄養量ならびに体力は45年度および50年度目標値と対比し、体力は標準値(新潟県教育委員会)と比較し、次の成績を得た。1) 摂取食品総数は20品前後で、動物性食品数が農村幼児の約2倍であった。2) 食品構成は、四季を通して魚介類の摂取が極めて多く、乳、淡色野菜、果実類も比較的多いが、緑黄野菜、油脂、肉類の摂取は少ない。3) 摂取栄養量の所要量に対する比率(%)は、蛋白質、Ca、鉄は四季を通して目標値を凌駕し、熱量は90(夏)~112(秋)、脂肪は73(春)~149(夏)であったが、ビタミン類の摂取は概して低く、特に50年目標値が高値となったV.Aは35(春)~51(冬)であった。4) 摂取蛋白質の動蛋白比は52(夏)~70(秋)%とかなり高いことが注目され、蛋白質は78~86、卵白は68~72、人乳は80~87、牛乳は89~92であった。5) 体力平均値は45年目標値の102%、50年目標値の97~99%であり、体力平均値は中位であった。以上の調査成績は諸家の報告とおおむね一致するもので、漁業地域における幼児栄養の問題点にはビタミン摂取(A, B₂, C)にあることが窺われた。